

氏名： 新井 由紀夫 (ARAI Yukio)  
所属： 人間文化創成科学研究科文化科学系  
学位： 文学修士 (1985 東京大学)  
職名： 准教授  
専門分野： 西洋史学、イギリス中世後期史  
URL： <http://www.li.ocha.ac.jp/hum/arai.htm>  
E-mail： [arai.yukio@ocha.ac.jp](mailto:arai.yukio@ocha.ac.jp)

#### ◆研究キーワード / Keywords

中世イギリス史／史料論／ジェントリ／社会的結びつき／家系文書史料群  
medieval history of England / sources and documents / gentry / social relationships /  
archive of gentry family

#### ◆主要業績

総数 (3) 件

- ・その他 (事典項目執筆など)  
新井由紀夫「シモン・ド・モンフォールの議会 (13 世紀半ば)」「バラ戦争 (15 世紀半ば)」歴史学研究会編『世界史史料 第 5 巻 ヨーロッパ世界の成立と膨張 17 世紀まで』岩波書店 2007 年、76-77, 77-79 頁。
- ・その他 (報告書)  
新井由紀夫「教育プログラム 1 比較社会史」「院生参加プロジェクト 4a 歴史的多文化・多民族社会におけるリスクとコミュニケーションの研究」『平成 18 年度 成果報告集 特別教育研究経費事業 コミュニケーション・システムの開発によるリスク社会への対応 (リーダー 平岡公一)』お茶の水女子大学 2007 年、9-20、49-52 頁。
- ・イギリス史研究会報告  
新井由紀夫「中世後期イングランドにおける贖宥状と社会」、イギリス史研究会第 10 回例会、2008/03/08、於明治大学。

#### ◆研究内容 / Research Pursuits

贖宥状 (いわゆる免罪符) とそれをもたらしたジェントリ階層の事情について、15 世紀イングランドを中心に検討しています。特に、国王ヘンリ 4 世およびヘンリ 5 世の宮廷官僚として活躍した、ジェントリのサー・ジョン・ペラムと、北部貴族のサー・ヘンリ・フィッツヒューが、1412 年、国王ヘンリ 4 世の病気が進行するなかで受け取ったそれぞれの贖宥状を比較しつつ、中央政界の動きと、贖宥状に見られる宗教社会的ネットワークを関連させつつ考察しました。今年度は、これまでの研究を発展させつつ、史料論という、よりひろい観点から研究報告をおこないました。(イギリス史研究会報告、新井由紀夫「中世後期イングランドにおける贖宥状と社会」、イギリス史研究会第 10 回例会、2008/03/08、於明治大学)。また、ジェントリの家系文書史料群を分析しています。

## ◆教育内容 / Educational Pursuits

講義では、昨年に引き続き 15 世紀のジェントリ家政会計簿を紹介しつつ、そこから何が読み取れるのかを議論しました。

ゼミでは、最近の雑誌英語論文を、一年に 7～8 本、担当者による発表形式で読んでいます。各自が分担して、要約・コメントし、それをうけて皆で議論するというやり方です。2007 年度の論文テーマは「14・15 世紀の社会的身分」「日本における西洋文明の需要と内国博覧会」「18 世紀仏の地方における出版検閲官」「イングランドにおけるロマネスクとドイツの関係」「古代ローマの剣闘士」「中世スウェーデンにおけるキリスト教の受容とルーン碑文」「13 世紀初期における騎士階層の変容」などです。テーマがあちこちに飛びますが、研究の新しい波にふれる充実感が味わえます。

## ◆研究計画

キャサリン・ラングレイというロンドン豪商出身でジェントリに嫁ぎ未亡人になった女性とラングレイ家に関する史料を集めて、ぼちぼち読み始めています。彼女の遺言書や彼女のもらった贖宥状、それにラングレイ家の会計記録などを読んでいきます。これらをもとに、キャサリンの生涯と社会との関係を再構築してみようことを計画しています。また、ジェントリの家系文書史料群（データは全部で 2000 件程度）を整理分析することを試んでいます。

共同研究は、

1. 中世ヨーロッパの史資料に関する研究（科研）
2. 歴史的・多文化・多民族社会におけるリスクとコミュニケーションの研究（平成 18 年度特別教育研究経費事業「コミュニケーションシステムの開発によるリスク社会への対応」プロジェクト）

## ◆メッセージ

なにごとにも好奇心を持ち、どんなことでもどん欲に楽しむという姿勢は、歴史学をやる上であんがい欠かせない要素だと思います。遊びや楽しみのなかから学問のヒントを得ることもあります。学生さん達との学科旅行での宴席で、比較社会史という授業のテーマ「ホモセクシュアルの比較社会史」が決まったのですが、やってみると奥が深く、史学の先生達との共同研究テーマにまで発展してしまったほどです。

歴史学で扱えないようなテーマはない、何でもありだと最近よく思います。歴史学をやる上でこうしなければだめだということもありません。われこそは、という皆さん、是非、お茶大比較歴史学コースにいらして下さい。

